

やまと 民俗への招待

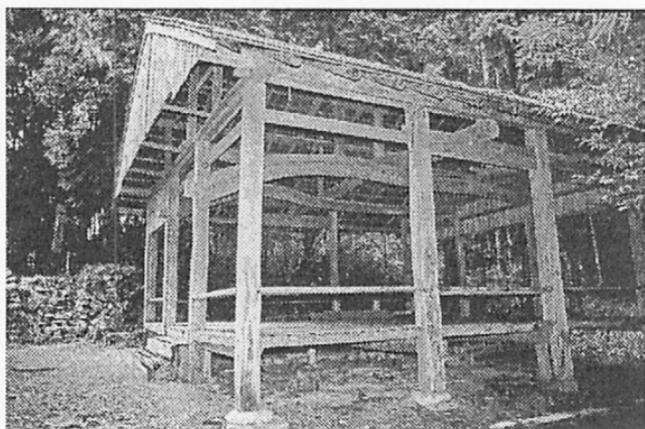
鹿谷 勲

幕末の紀州藩士畔田伴

存が書き残した篠原（五條市大塔町）の踊り堂は今はないが、周辺地域では、盆踊りがよくお堂の中で行われていた。高野山と大峯山を結ぶ高野街道と十津川から熊野へ通じる十津川街道が交差する地に阪本（同）という集落がある。ここには阪本踊りと呼ばれる盆踊りがあり、天神社境内に櫓を建てて踊っていたが、元来踊り堂と呼ばれる吹き抜けの建物で踊られていた。手踊りや扇踊りがあり、「開き」で踊り始め、「中入り」ではおにぎりなどを食べて休憩し、夜の更けるまで踊り、「祝い歌（伊勢音頭）」

で終了していた。

この阪本の集落の北東に簾（すだれ）という集落がある。急峻な山の斜面にわずかな家が点在していた。かつてお盆の時期に訪れると家々には人があふれていた。この光円寺境内にも、踊り堂があった。切り妻鉄板葺きの屋根で吹き抜けの三間四面の堂だった。寺で盆会を勤めてから踊りが行われた。堂内にはもとお釈迦さんが祀られていたといい、昭和40年代半ば頃までは踊り堂で踊っていたという。簾の北方の天



旧大塔村簾の踊り堂＝1989年撮影、筆者提供

辻では地藏堂で踊り、阪り堂が残る。堂の周囲に本の南西方の中原にも踊丸太を組んで棧敷を作

り、ここで飲み食いをしたり、休憩を取ったりしながら踊りを楽しんだという話も各地で聞いた。南の十津川村の小原や武蔵でも堂内で踊りが行われていた。板敷きの堂に下駄を履いたままで踊ると、太鼓の音や歌声が響くだけでなく、人々の熱気がこもり、大勢の足音はじかに踊る者に伝わってくる。誰かが足さばきを間違えるとすぐに分かる。反対に足並み揃えば、その場の者が一つになったような独特の一体感が感じられる。ある

年、元の小学校の校庭で踊られていた武蔵の踊りが、雨が降り始めたため、傍らにあったお堂に場所を移した時、屋外では感じられない踊りの濃密さと高揚を感じて驚いたことがある。堂内で踊る意味がよく分かった。十津川村谷瀬では今も会所の中で踊られている。出谷では、かつては大きな家を借りて、畳を上げて踊っていた。踊る場の熱気と一体感は踊りには欠かせない要素だった。「踊り堂の下にさぐり堂をたてていつかまた殿にさぐらじよ」という歌詞も伝わっている。

熱気ある堂内の踊り

（奈良民俗文化研究所代表） 次回回は5月8日